

# 基調講演

## 「震災後の政治～復興への提言、その後～」

講師 御厨 貴氏

東京大学先端科学技術研究センター 教授

同大学院工学系研究科建築学専攻兼任教授

ただ今ご紹介をいただきました御厨でございます。今日は震災後の政治ということで、どちらかという政治に類するといえますか、今後、この日本の政治がどうなるのだろうかということを中心に、1時間ほどお話をしたいと思います。

基本的には、野田政権が一体どういう政権なのかというお話を主体にして、その前後のお話をすることになると思います。時間が限られておりますので、早速、議論に入りたいと思います。

### 1—野田政権の成立

野田政権の成立というのは、この国の3・11以来、いわゆる政権交代以来のある種のざわめきにも似た落ち着きのなさに、一つの態度変更を及ぼしたような気がします。この野田政権はご自身が「ドジョウ総理」と言われていますけれども、政権交代後少なくともこの2年間、宇宙人と言われた鳩山さん、市民運動家として、恐らく総理になってからもその運動家としての使命を貫いてきた菅さんに比べた場合、ドジョウと言いますが、私は彼が選ばれたときに、「これは木綿のぬくもりだ」という言い方をしました。つまり、何となくくるまれていると安心するという、そういう形の総理が3代目にして現れたという、そういう感じでした。

この政権ができるときの風景を考えてみますと、この政権は成り立ちのところから、メディアの報道がすごく安定的であったということが言えます。後でも少し申しませんが、この民主党政権の一種の政治における素人っぽさ、あるいは素人そのもの、一体何をやっているのだという国民の怒りのある部分は、実はメディアの責任です。メディアは、改革とか物事を変えるということに関して、それ自体は非常に賛成という態度を取ることが多いわけですが、しかし同時に、自分たちの報道のやり方、仕方に関してはものすごく保守的なものです。従って、政権交代後の新しい政権に関して、メディアは必ずしもそれにフィットする報道をしてきませんでした。絶えずいらだちがあり、それがまた報道の面にも表れてくるということがあったわけですが、野田さんの登場は、彼らにもものすごい安心感を与えました。これは恐らく彼らの多くがそうだったでしょうし、私自身もそうだったのですが、組閣の風景、光景を見ていて、これはどこかで見たことがあると感じた。よくデジャヴと申します。既視感というのですね。既にどこかで見たことのある感じ、これがこの政権には非常に強いのです。

## 2—デジャヴの風景

最初に組閣の風景です。組閣の風景のときに思い出すのは、過去2代の政権は、それまでのやり方を踏襲しませんでした。今回は、官房長官が決まりその周りの役職が決まり、最後に閣僚の呼び込みがあって、呼び込まれた閣僚が次から次へと官邸にやって来ます。テレビの映像で見ていると、一人一人下りてきて記者が皆わっと近寄って、それを払いのけるようにして当事者が官邸の奥に消えていくという、この風景は自由民主党が政権を取っていた時代には毎回あった姿です。それがようやく復活したねというのが、今回の私の印象の第一でした。と同時に、特に新聞が使った表現の中に「滞貨一掃」という言葉がありました。

これは自民党のときにはしょっちゅう使われました。つまり、自民党内閣というのは能力主義であるという面もありますが、基本的には当選回数主義ですから、その当選回数主義の中でも能力的に優れていると認められない人は、なかなか閣僚になれませんでした。それを毎回少しずつ閣僚にして、一丁上がりをしていくのを滞貨一掃と言いますが、その言葉が民主党も3代目にして初めて使われたわけです。

政権に就いたけれども、閣僚のポストにはなかなか就けなかった人が今回は見事に就いたのではないかと。小沢さんに近かった人たち、あるいは旧社会党で閣僚になるのはとても無理だと思われたような人たちが今回は大臣の座に座ったということで、滞貨一掃という言葉が出ました。

それから大臣の経歴を見ますと、これもはっきりしていますが、自民党内閣のときには、自民党一党ですから、それこそ政務次官から始まって大臣やあるいは党の役職をやってきたが、この新しい大臣ポストは初めてなので未知数であるという書き方をしました。それと同じ表現が今回随分見られました。たかだか2年ですが、2年でも政権です。既に副大臣を二つぐらいやっていて、今回大臣ポストとしてやるのはこういうポストであって、これは普通の、今までのやり方とは違うものになるかもしれないという書き方、書かれ方、これはすべて自民党政権のときに戻った書き方です。多分、デスクも安心して、こういう書き方をしたのでありましょう。

つまり、全党的に民主党内閣として見れば、これまでとは違って、排除された人たちがほとんどいない、全員野球で全員が入った。新聞は能力主義とか、あるいは強いリーダーシップを取れとかよく言いますが、彼らが安心して紙面を作るのは現実にはそうではありません。リーダーシップもあまり取れず、協調型あるいは調整型で、全員野球でみんなが閣僚のポストに座っているような事態を、非常に喜ぶということが実はあります。そういう点では今回の野田内閣はそこにすぽっとはまる、そういう形のスタートをしました。デジャヴはまだ続きます。

そして、最初にこの内閣がやったことは何であったか。前内閣の終わりから見られたことですが、いわゆる事務次官等会議に類する会議を復活する。それから今作りつつありますけれども、これを復活と言うかどうかは分かりませんが、経済財政諮問会議に類する会議を作る、それから党税調を作る、これは全部自民党なのです。自民党のときにあった姿にぴったり戻ってきています。しかも最近では、小沢さんは「法制局長官に答弁させない」と言ったわけですが、この法制局長官に答弁させるということも決めたわけですね<sup>1</sup>。では一体何が変わったのという話になるのですが、実はそういう形で、自民党政権のかつて有効であったやり方を野田政権は見事に、一つ一つはめて元に戻しているわ

<sup>1</sup> シンポジウム講演後、内閣法制局長官の答弁復活は、民主党側で検討が続いているとして先送りが決まった。

けです。

これが及ぼしている影響は非常に大きなものがあります。先ほど私も復興構想会議の一員だというご紹介がありましたが、復興構想会議をやっている間、若い官僚職員と一緒に随分仕事をしました。彼らがいかに優秀であるかという話は後でまた少し申し上げますが、そういう優秀な諸君とやっていました。

その人たちの一部は、今回また本省に戻り、あるいはまた別の方から新しい人が入ってくるという異動はありましたが、そんな中、彼らと会ってみますと、やはり仕事をする気になっています。不思議ですよ、これは。こういう気分や風というものには五感で感じないと分からないもので、いちいち説明して、「いよいよ野田さんだから頑張ります」とそんなことは誰も言いませんけれども、やはり何となく雰囲気は「俺たちが仕事ができる 때가来たよね」という感じを持っていることは間違いないわけです。

そして、これも後で少し触れますけれども、私なども、昨日、おとといと構想会議の議長代理として、宮城県、岩手県のフォローアップ視察に行っていました。そのときに同行してくれていた事務局の若手の官僚が「やはり、菅さんだともうは進みませんでしたね」「野田さんになってから何が変わったというわけではないけれども、やはりあの人の下なら仕事ができるという、そういう相場観はありますよね」と、言うともなく、言わずともなく言った言葉が私は印象的だったわけです。

つまり、この内閣だったらやってもいいという形にようやくなってきました。2年間彼らは仕事を奪われていたわけですから、当然やりたいことは山ほどあります。しかも復興です。復興だけではない、原子力の問題もある、いろいろな問題がある。それを言わばこの国の非常に重要な問題として解いていく、そういう作業にようやく官僚の諸君が参加できるという感じになったことは、大きな変化だと思っています。

### 3— 罷免権を使うことを覚えた強さ

ですから、すべてがデジャヴになる。この内閣も発足時、支持率が60%を超えました。私の番組などでもよく3代の内閣を比較して、「みんな最初は高かったけど、みんな落ちます」みたいなことを言って、「野田さんの内閣もいずれ落ちますよね」みたいなことをやるわけですが、私は「このフリップは多分間違いのフリップになるよ」ということをそのときに言いました。「なぜですか。二度あることは三度あるって言うではないですか」とプロデューサーが言いますから、「いやいや、三度目の正直っていうことがあるので、これはこういう形には多分ならないだろう」と。「いや、もう既に経済産業大臣が失言していますよ」みたいな話があったときに、「失言した？ あれが失言だったかどうかというのは、これまたもう一つ別の問題だが、とにかくそれを速やかに更迭した。これは大きいよ」という話をしました。

これまで内閣は、ある時期から、特に安倍さんの内閣からそうですが、小泉さんはバサッとやったのです。ところが、安倍晋三内閣から1年ごとに交代してきたこの5代の内閣は、閣僚に何か事があったときに、それをすぐに切る、そしてその内閣と政権を守るということをしてきませんでした。それが故に、政権そのもの、あるいは総理大臣そのものが弱っていくという事態をずっと招いていたわ

けです。閣僚一人を更迭するというのがそんなに大事なことですかと言われるかもしれませんが、総理大臣のいわゆる罷免権、もちろん今回の場合も罷免したわけではありません。しかし、辞めなければ恐らく罷免されたであります。つまり辞表を出させたということは、任命するよりもむしろ辞めさせるときの方が、実は総理大臣はある種の強さを持つのです。「野田さんってこんな顔をしてドジョウみたいだけど、やはりやるときにはやるんだ」、つまり人事権を使ったよねということです。

これは保守本流の時代にはもう当たり前のようにあったことです。例えば古い時代になりますけれども、佐藤栄作が総理大臣だった時、彼は8年間、内閣を維持した人ですが、彼は平気で失言をした閣僚、あるいは特急を自分の選挙区の駅に止めた大臣をバサッと切っていました。バサッと切って、しかも、あの当時の総理はすごかったものです。「やはり野に置けレンゲソウだ」と。今なら説明責任とか何とか言われるところですが、そんなことは一切言いません。要するに、「かわいそうだから一度起用してやったけど、やはり駄目だった。駄目なものは駄目ね」ということを言って、それをみんな新聞もそうかと思って受け取っていたという時代です。

つまり、それぐらい罷免権というのが相当強いものでありました。それがずっと使われなくなってきたていましたが、それを今回かなり早い段階で野田さんがやったということは大きかったわけです。もちろん自民党はこれを問題にすると言いました。そして、この問題を通じて徹底的に説明責任を問うということを行ったわけですが、もはやそれは問題になりません。その後に枝野さんという、これまたこわもての非常に強い大臣を据えましたから。後継者がこれだけそろってしまえば、前任者がうんぬんということは恐らく国会でも今後も問題にならないという時代になりました。つまり、事が起きたら早く処理すればいいという自民党末期でもできなかったことを、民主党はここで初めて覚えたということでありまして、これは結構重要です。

従って、今の内閣は見てくれ以上に、どんどんいろいろなことを始めております。そのすべてがうまくいっているとは到底申しません。総理大臣がやらなければいけないこと、それから総理大臣の持っている資質はそれぞれによって違いますから。野田さんがこれでもう完全に上向きになってピーンと飛んでいくかといいますと、そんなことはないと思います。しかし、過去2代の政権のように「とてもでないけれども、これは最初から大変だよね。これはいずれ墜落するよね」という感覚は持っていないということになります。

#### 4— 普通の人の感覚と辻立ち説法

野田さんが持っている「普通の人の感覚」ですが、実は彼は普通の人ではないのです。野田さんの場合、やはり彼がすごいと思うのは、役職に就く前に何度か彼に「時事放談」に来てもらったことがあります。そこでお話を聞いたこともありますが、やはり彼の政治家としての取り柄というか、彼を政治家として成り立たしめている一番のゆえんは、船橋の駅や千葉県の駅で、毎日毎日、毎朝毎朝、いわゆる辻立ち説法をして、20年を超える毎日それで過ごしたという、この経験がやはりすごく大きいのだろうと私は思います。

実際に僕は時事放談で「毎日辻説法をしていると、やっぱり国民の空気っていうのは読めますかね」ということを聞いたことがあります。そのときに彼ははっきりと「読めます」と。つまり、「何年も



立っていると、今日の空気は冷たい。なぜかなと思うと、それはやはり自分の関わっている政党が何か不始末をしでかしたときで、野党にしてもやはりこれはまずかったのかということを感じる」と。そういうことがそのときの雰囲気から分かる。肩をたたいていく人あり、目の前を「ご苦労さん」と言っていく人あり、いろいろな人がいるのですが、そういうことが一切なく、彼を拒絶する空気になるところがある。これは空気を読むということですが、やはり彼はそれができるわけです。

変な話ですが、空気を読むことができるというのは、最近の総理大臣としては珍しいケースです。過去5代、1年ごとに辞めた総理大臣の中で、そういう意味での空気を読むことができる総理大臣としては、恐らく彼がナンバーワンであろうと思います。それ以前の総理大臣はどこかKYのところがありまして、なかなかスッと国民の空気を読むことができませんでした。彼はそれを読み取ることができる。

ですから、彼のその機能というのが、多分、官邸に居ても、国会に居ても、そして官僚と会うときにも醸し出されてくるということであれば、この辻立ちをして二十数年以上という経験が、彼の中で総理大臣として化けていくための一つの力になっているということが言えるのではないのでしょうか。私はそう思います。

閣僚にしても党人事にしても、妥協したと新聞は随分言いましたけれども、結果、今かなりみんなが仕事をするようになっていきます。これは自民党政権のときもそういうところではありましたが、民主党の場合、初めて政権に就いた人たちは、何か仕事をしたいというのは偽らざるところであります。その能力があるかどうかは取りあえず置いておいて、そういうところなんです。そして今回は、いわゆる小沢であれ反小沢であれ、どちらにしても、かなりのところの人をいろいろなポストに起用して、仕事をさせ始めたということがあります。ですから、この点の配在と申しますか、その配置の仕方というのは、適材適所ばかりとはもちろん申しませんが、これ以前の内閣に比べますと、スタートラインはかなりうまくいったと言うことができるのではないのでしょうか。

## 5—自民党の派閥の弱体化と参議院議員の力の増大

先ほど、デジャヴのところの一つだけ言い忘れました。もう一つこの内閣がやったことは、前原さんが政調会長に座ったということもありますが、政調会で政策の集約をするということをしてしました。これも自民党が政調会で集約をしたことと重なって見えてくることです。このように、すべてそういう状況になってきています。そうすると、自民党としては攻めあぐねるわけです。つまり、自民党は「俺たちがやってきたやり方の方がはるかにうまくいったではないか。民主党になってそれを全部壊して、結果この体たらくだ」と、民主党をひたすらこきおろせば済んだ状況から変わってしまいました。つまり、民主党は俺たちの一番いいところを全部学んで、元に戻しているではないかという話になるわけです。そうすると、今度はよほど注意しないと、民主党を攻撃することは、かつての自民党を攻撃していることと同じことになってきます。

ですから、国会でも今後またあの罵詈雑言に近いような野次が出るかも知れませんが、今度はそれが自民党の中の責任問題として戻っていくということに恐らくなるのだらうと思います。

昨日の読売新聞だったと思いますが、非常に印象的な記事が出ておりました。最近自民党の派閥が

どうも復活傾向にあると。自民党の今回の党役員人事を見ますと、町村派などの三大派閥がまたポストを握ってという話と同時に、自民党ではついに無派閥が一番多くなったという記事が出ておりました。そういう時代が来たのだなと。石破さんのようにもともと選挙に強くて派閥に居なくてもという人たちは派閥を離脱する、その勢力が一番多くなったということです。それが面白かったというのではなくて、私がそこで見たのは、派閥の所属議員の数が、衆議院議員より参議院議員の方が多いのです。これは当たり前のことですよ、衆議院があれだけ減ってしまったのですから。しかし、あまりみんなそれを意識しないで来た。

これまでの自民党の派閥というのは、どんなことがあっても衆議院の数の方が多くて、参議院の数の方が少なくて、そして衆参と言えば衆議院の議員が圧倒的にリードして、派閥の中でも参議院がついてくるという話でした。それがあつた段階からだんだん逆転をし始めているというのは、皆さんもご承知のように、総理大臣は衆議院で選ばれるにもかかわらず、参議院の選挙で敗れたときには退陣するという。古くは1989年の山が動いたマドンナ選挙、いわゆるリクルートの後の選挙で、宇野さんが個人的な問題もあって参議院選挙に敗れて退陣。次は、ご承知のように橋本龍太郎。彼は行革等々を非常に頑張っていたにもかかわらず、景気が悪化し、その結果、参議院で敗れて退陣。その次がご承知のように森さんです。森さんは衆議院の選挙で辛うじて勝ったにもかかわらず、その後加藤の乱というのがあって、衆議院で信任されたにもかかわらず、次の年の参議院で負けそうだという。これは、負けてないのですよ、負けそうだというだけで更迭されて、小泉さんに替わった。こういう事例が多いわけです。

昨今では、衆議院で圧倒的多数を持っていても、参議院でねじれて総理大臣が1年に1回ずつという感じになってきたのは、まさにそのことであります。要するに、参議院の立場が強くなったというのが、この20年の歴史の示すところですが、自民党における衆議院議員があれだけ少なくなりますと、派閥の中での数の逆転が起こる。しかも、数の逆転よりさらに大きいのが、結局ねじれでもって民主党を攻め込むことができるのは実は参議院だということなのです。衆議院はそれがなかなかできない。参議院は問責でも何でも出してきてやれるというところを見せてしまいました。つまり、事ここに至って、参議院の議員の力が自民党の中では強くなっているという現象があります。これも、これから自民党が政権に回復していく上での難しい点の一つだと思います。中曽根さんを中心とする参議院におけるポストをめぐる争いが、あそこまで激しくなったのは、やはりそれが一つの原因であると見ることができます。

この話をもう少しきちんとまとめると、どうなるか。つまり、参議院がそれだけ強い力になってしまった。すると、結果としてですが、民主党が参議院議員である輿石さんを幹事長に据えたことの意味は、実は全部小沢さんに明け渡すために輿石さんを幹事長にしたというのが今までのメディアの解釈でしたが、どうもそうではない。つまり、参議院対策が一番なのです。衆議院で通っても、参議院でもたまたまされる、あるいは否決されると困るわけですから。そうすると、法案を通す、あるいは予算を通すということが一番に考えたならば、衆議院ではない、参議院対策ということまで考えた上で衆議院対策を考えないと、いつどのようにしてこの法案ないし予算を通すかが全く見えてこない。過去2代、特に菅さんの内閣の時はそうでしたけれども、法案が通る見込みが全然見えてこない。なぜかといいますと、衆議院でやっくらさとやっても、参議院のところでもたまたまやっくらさとや

るからです。

これは野田さんの知恵であるかどうかは分かりませんが、これでうまくいけば、少なくとも野田さんの見通しが正しかったのだという話になると思います。輿石という人を幹事長に据えて、参議院対策まで見せた上での始動が始まっているということです。

もちろんメディアは書きます。「輿石は衆議院のことが分かっていないから、衆議院に関しては困る」と言いますが、衆議院は樽床さん以下、ああいう手だれを幹事長代行ないし代理に据えていますから、それでやっていける体制になっているということになります。つまり、どうやら国会が回り始めるのではないかという感じが出てきました。これもデジャヴです。普通は与党が国会は回すものですから、野党はそれに盾突きながら付いていくという、従来のやり方に戻るかもしれない。そうすると、すべて自民政権の時と同じような回り方になっていくということです。

## 6—公明党の自民党離れと民主党政権の安定

その辺を微妙に感じているのが、やはり公明党ではないかと思います。菅さんになってからは特にそうですが、公明党はこの1年間、今までの自公を離れて、社公あるいは民公になろうとすると言われながら、最終的にできませんでした。それはもちろん菅さん以下の接遇のまずさということはありませんが、しかし、ここへ来てやはり自民党から離れようとしています。つまり、何となく敗北主義になってしまった自民党とずっと一緒にいると、この党は困るということで、かなりの程度妥協しようということで、ぎりぎり民主党に迫っているわけです。

これは多分不可逆的だと思います。野田さんという人が総理大臣を続ける限り、この方向性をずっと追っていくことになると思いますので、途中でかなりぎくしゃくがあるとしても、その方向に行くだろうという感じがします。

ですから、私が今日ずっとおしゃべりをしているのは、野田政権はかなりの程度、前よりはやるのではないかと。解散期待というか、メディアはすぐに解散とか何とかと喜ぶわけですが、解散というのはよほどのことがない限りないのではないかというのが今の見通しです。ただ、分かりません。解散にはハプニングというのがあります。やっさもっさしているうちに突然解散に持っていかれてしまうということが今までにもありましたから、絶対ということはありませんが、すぐには解散はない。みんなが一番あり得ると想定して、みんなが多少首をかしげて思っているのは、やはり予算を通すときです。これは参議院でもめたりして、いよいよ予算が通せない。通さないというわけにはいかないだろうというときに、総理大臣の首を差し出して「予算を通してくれたら総理は辞めます」という、昔、自民党がよくやった形です。竹下さんなどはそれで辞めたわけですが、そういうやり方をメディアは全部考えるわけです。もしこれが実現すればこれまたデジャヴの再現ですが、よく考えると、そこまで同じことを民主党政権はやるだろうか。よく分かりません。しかし、今のところ、その轍(てつ)を踏むつもりはないような感じがします。恐らくこの政権が窮地に陥るとしたら、後で少し復興の問題も言いますが、恐らく内政問題ではなくて、やはり基本的に外交の問題だろうという感じがします。



## 7—日本を取り巻く外交問題と若い学生の反応

一番大事なのはやはり外交です。とりわけ今問題になっているTPPの問題とか、それからヨーロッパの問題、あるいはいろいろな金融問題に対して日本がどう対応するか。もちろんその一つ一つはものすごく慎重を要する話ではあるのですが、沖縄問題に端を発する日米関係の基軸をどうするかという問題で野田政権が過った措置を取った場合に、かなりガタガタになる可能性があると思います。

覚えてらっしゃると思いますが、前回の鳩山政権の後、周辺の国は日本に対して一斉に攻撃の刃（やいば）を向けてきました。一番象徴的なのが領土問題です。尖閣諸島の問題しかり、北方領土の問題しかり、とにかく北方領土にはメドベージェフが来たわけですから、これはかつてないことです。尖閣諸島にしてもあれだけの問題になりました。つまり、日本人が考えるときに、いわゆる中心的課題とは思っていないが、外から主権の問題として考えたときに、一番重要な領土問題というのですぐ揺さぶられるわけですね。日米関係を基軸としてしっかりしていればそんなことは起きませんが、それが揺らいだと見られるや、すぐにやられるという状況にあるのだということは、われわれは菅政権の時に学習したはずなのです。恐らくアメリカの一部が今そう思って行動をしていると思いますが、われわれアメリカは、占領以来あるいはそれ以降も半世紀以上にわたって、日本という国を、いわゆる軍事、安全保障の問題で、基地も置き、ずっとこの国を守ってきた。しかし、本当にこの国を・・・この国というのは日本ですよ、日本を守る価値が今後ともあり得るだろうかという議論は、既に学者・知識人レベルでは出ています。また、それ以上に、アメリカの政権の中でもそういう議論が出ていないとは言えない状況にあります。見直した方がいいのではないかと。日本は本当にアメリカの安全保障に役に立つ国なのか。在日米軍を引き揚げることも考えてもいいのではないかと。かつてのアメリカなら、そんなことは全く思いませんでした。日本は非対称型であっても、安全保障の対象であるとずっと思ってきました。ところが、もう今やお金の問題一つで言っても、日本を守るためにこれだけの金を使う必要があるのかということが、かなり深刻な議論になってきています。そこをわれわれは見なくてははいけないわけです。

この50年間、もっと言えば、占領以来の日本とアメリカとの関係の中で、日本の方もアメリカに対するいわゆる安全保障の問題、軍事の問題に関して、極めて希薄な意識になっていることは間違いのないのです。一番いい例は、私が今教えているゼミの学生の反応を申し上げれば非常にはっきりすると思います。彼らに「領土問題、去年いろいろあったけれども、あれをどう思うか」と聞いたことがあります。「あれはやはり国家にとっては主権の問題だよな」みたいな話です。大体みんな法学部に行く文Iの学生が多いのですが。大体、みんな二十歳ちょっと過ぎぐらいですか、90年代に生まれた諸君であります。その多くの諸君で「これは大変な問題である。日米間にとって致命的な問題になり得る可能性がある」ということを言った人は一人もいませんでした。「領土問題、まあいいんじゃないですか」と。「いいんじゃないって問題ではないだろう」ということを言うのですけれども。「これを先途に中国が攻め込んできたらどうする」とかいろいろ言うのですけれども、「まあ中国もあれ以上はやりませんよ」とか、「メドベージェフが来たぜ。北方領土、向こうはいよいよ自分の領地だと本当に思うぜ」みたいな話をすると、「そうだったら、それでもいいんじゃないですか」みたいな、そういう反応です。「よくないだろう」と僕は随分言ったのですけれども、やはり彼らの認識を正す



までには至りませんで、「それでいいんじゃないですか」という議論が多数でした。

これは全員がそうだとは言いませんが、彼らが若いときに特に変な教育を受けた、あるいは若い時代に全く教育を受けなかったということとは別に、今の若者のある種の一つの気風なのです。しかし、その彼らが、「まあ〜」とかいう連中が、実は今回のこの東日本大震災の時は、黙って、密かに、密かにと言っても別に隠れて行っているわけではないのですが、別に大きな声を出すわけでもなく、時々バッグを背負って消えることがあります。「ちょっと行ってきます」とちょっと行って来る。それで、大体3〜4日すると帰ってきて、また普通に研究室に出入りして、後で聞いてみると、「実は被災地に行ってきました」「被災地にボランティアに行ってきました」「へえ〜」という話で、「何で言って行かないの」「そんなことわざわざ言うて行くほどの話じゃないでしょう」。行って見て、「今度は別の所に違うあれで行ってきますから」と。彼らはネットを持っていますから、そのネットの中で、どこに参加してどう行ったらいいか分かっている。別にうちの学生がまとまって行っているわけではありません。その中で個人個人が思った所に行っています。そして、それを得意げに話すわけでもなく、帰ってきたらまた普通に生活をして、また出掛けていっているという。これが彼らの今のボランティアかたぎであると言えるわけです。

そうすると、外の問題やよその問題に関心がないわけではありません。行ってみますと、そこで海外からの留学生と一緒になったりして、結構いろいろな議論をしてきたということもあるわけです。つまり、そういう感じの新しい日本人が今生まれつつあるときに、どうやって彼らとわれわれが・・・私も60歳ですから、この還暦に達したおじさんとか、おじいさんとか分かりませんが、それが対応していくのかというのは、やはりよほど柔軟に考えないと、ある方面からがんがん言っても駄目だということになるわけです。そういう若い人たちに、どうやってこの日米安保の話をしたらいいのかということになるわけです。これは私の課題でもあり、同時にこの国の課題でもあると思います。

話を戻しますと、今言ったように、日米関係がかなり危ういところに来ていることは間違いない。こういうのは、みんなは「えっ」と言うのです。「そんなことはないでしょう」「アメリカ軍が引き揚げるなんて想像もできません」と言いますが、想像もできないことが起きるのが政治や外交であって、少なくともそういう警告を受けるかもしれない。受けてからオタオタしていたのでは困るわけです。

それではどうしたらいいかという問題になります。野田さんはそのところの勘が働くかどうか。彼は内政においての勘はいいと思いますが、外交に関してどうであるか。つい先日、韓国に行ってきましたが、これをどう評価するか。それから、これから国際会議が続きますが、それをどう評価するか。今回がうまくいなくてもいいのです。次の回にうまくいく芽が出ればいい。つまり、これはさっきも言いましたけれども、野田さんが総理大臣として化けていくプロセスの一つになればいいのです。そうなるかどうか。内政の方はちらっとそういう感じが見えますが、外交はいまだという感じですから、ここはずっと注目しなければなりません。

## 8—野田政権を取り巻く内政問題

そして内政上の最大の問題は、言うまでもなく復興です。復興の問題は、3次補正が通ると同時に、

今いろいろな法律改正をしています。その法律改正の中で、これまでよく言われていたように、各省間にまたがることで、各省にお願いを立てないとなかなか進まないということを、ジャンピングしてできるような制度を今整えつつあります。それから特区制度、これはわれわれが復興会議で特区がみだりに使われないように慎重にしたものを、今の政権の下でかなりそれを緩めて、使えるような形にしつつあります。それから、自由に使える交付金の制度のようなものもかなり導入しようとしています。

ですから、恐らく10月～11月、「それではもう遅いんだよね」と言われるかもしれませんが、すべてではありませんが、われわれの構想会議で作った提言が間違いなく形となって実行できる段階に来ることになると思います。従来なら「地方などに任せたらどういふことをやるやら分からん」と言っていたのが、今回、財務省も相当考えを変えてきています。ですから、そういう意味では、彼らにとっても干された期間があったというのは、逆に有効に働いているのかなという気もするくらいです。

ですが、復興に関しては地元の復興格差がかなり出てきています。これは、昨日、おととい、私が宮城・岩手両県に行って見てきた感じから言ってもそうです。いわゆる首長さん、市長さんのレベルですが、市長さん、町長さんのリーダーシップといいいますか、彼らのこの問題に対する取り組み方の違いで、早い遅いが既に出てきています。われわれが行って話をしたときに、もうこういう新しい仕組みがありますよということを事務局の諸君は紹介するわけですが、それを市長以下全く知らないという、そういう市もあるわけです。これは出遅れです。彼らから話が出たのは、これもできない、あれもできないという話で、「いや、それは今解決されているはず」「それは知りません」という。そういう市はますます脱落していきます。

そうではなくて、市長自ら本当に廊下トンビのように飛び回って、そして地元の代議士も動かす、地方の東京にある事務所にかなり優秀な人間を置いて、そこと官庁との間のパイプを太くする。自らもとにかく1週間に一遍は東京に出て、東京の霞ヶ関官僚や何かに会うということをやっているところは、われわれが行ったときに「次はこのメニューですね」ということを知っているわけです。「うちはこのメニューは関係ないけど、次に出されるこのメニューは欲しいから、それに向かってもう書類書きを始めている」と言うのです。そういうところは本当にどんどん復興が進んでいきます。ですから、復興格差というのは、そういう意味では言わば地元のリーダーシップによってくるところがある。

それがうまくいっていないところに対してどうやって手を差し伸べるかというのは難しい話です。われわれが聞いていても、何にもしないで国からもらう餌を待っているという地域に対して、国の方がそこに寄っていかなければいけない問題であるかどうかは、やはり少し首をかしげるところがあります。もちろん全体として遅れていることは間違いありませんが、そうは言っても、あれだけ広い被災地域の中での問題です。放射能の問題、つまり福島の問題を除けば、宮城や岩手では、まだ復興とはいきませんが、それなりの復旧の形はついてきていて、例えば今回の提言の目玉である高台に対する移転の問題でも、地域によってはそれがかなりうまくいきそうな地域が出てきています。地域によっては、とんでもない、まだ全く造成されていない原っぱのような所に住民を移そうとしているところもありまして、これは絶対無理だろうと思うわけです。つまり、自分たちがそこを提示されても絶対行きたくないと思うような所に、「ここに移ってください」と言っても、誰も移るわけがないとい

うことがありますから。そういうメッセージの出し方にやはり問題が出てくるかもしれません。そのメッセージの出し方に関しては、あるいは国の方から、「それはこういうふうにした方がいいのではないか」というつなぎ方ができるかもしれないと思いました。

復興の問題が一つあって、もちろん復興の問題の次にいろいろな問題があるわけですが、次に来るのは、国会議員にとっても自分自身の首を絞めることになるかもしれませんが、多分この国会の選挙制度、そして議員定数の問題をどうするのという話があります。これをどういうふうにやっていくか。これが難しいのは、20年前のいわゆる政治改革の時はものすごく熱気がありました。今は全くありません。政治家というのは、自分の得にならないことはやらないのではないかとお思いかもしれません。もちろんそうなのですが、政治家というのはある種不思議な生き物でありまして、客観的に見れば自分が損になることでも、ある政治的情熱に燃えたとき、「そうは言っても当選するかもしれない」とか言って、強引に政治改革のある種の方向にわーっと行くときがあります。20年前はまさにそれで行ったわけです。

それが今回あるかどうか。つまり、非常に散文的な状況の中で、定数の削減などというものが決められるかどうかという問題があります。しかし、政治的な熱情だけではなくて、冷静に冷めているときでも改革ができるのだということを示すこともあり得るかもしれない。われわれはそれにいちの望みを託したいという気はします。野田さんだからできないではなくて、野田さんだからできたということになるかもしれないということです。このような外交の問題、内政の問題等々があります。

## 9—小沢一郎の問題と制度改革

最後に、小沢さんの問題を言っておかなければなりません。

小沢さんは、間違いなく彼の力がなくなっていく方向にあると見ざるを得ません。この間の裁判の結果、秘書3人が思いもかけず3人とも執行猶予付きの有罪になりました。もちろん、あの裁判に関しては、裁判官が自分で心証を作ってそういうふうにしたのだからけしからんとか、あるいは、検察官の証拠採用がなかったのではないかとか、いろいろな議論が交わされていますが、そのすべてにおいて、実はこの国の検察と裁判の在り方が問われていると言えるでしょう。つまり、この国においてはこれまで立法・行政に比べて遅れている、ないしは棚上げにしている権限が司法権でありました。検察も一種の司法行政権で、これも同じです。それがここ数年、ものすごい勢いで皆の注目を浴びるようになり、そして検察審査会という本当に盲腸のような存在の権限を強める法案を全会一致で5～6年前に通しているのです。小沢さんですら賛成した法案であります。ほとんど議論していませんから、中身がみんなは分からなかったと思いますけれども。それが、今やその盲腸がこの国の全体を振り回す状況になった。これも歴史の皮肉です。こういう制度改革というのは、みんな実質を伴うと思わないでやった。ところが、それが今効いてきているという状況にあります。検察審査会というのは事実上裁判権に属する話ですが、小沢一郎はこの司法権の一番最たるところで破れ去ろうとしており、それに先だって政治的なインパクトを大きく失う段階に来ているということです。

小沢一郎という存在が民主党の中で果たしていた役割は異常なくらい大きかったわけですが、それが自然現象で言うのだんだん引いていく。小沢さんとしては、これに文句は言えません。つまり、先



ほども申しましたが、野田さんは全党一致の人事をやった、小沢さん自身が考えられないぐらい、親小沢の連中がポストを占めてしまった。ポスト的に文句は言えない、彼らがやっていることに小沢さんは異を唱えることはできない。つまり、野田内閣全体に対してNOを突き付けることはなかなか難しい。問題は、彼の党員資格停止を、さらに除名にするとか何とかというそういう問題だけではありません。野田さんはそこは非常に利口ですから、時間は自分に有利だと思っている。つまり、時間がたてばたつほど小沢さんは弱っていく。小沢さんが弱っていった最終的には自分の足で立てなくなって、どーんと倒れたら、そのときに切ろうというのが多分野田さんが思っていることです。

ですから、これから裁判でどんな動きがあっても、多分野田さんはそれに対して今すぐ彼をどうこうするとは言わない。言わないからといって、野党あるいは民主党の中の反小沢勢力がこれまでのように何か言うかということ、それを言ってももう仕方がないという段階にだんだん来ているということになっていますから、そういう点で言うと野田さんに非常に有利な状況になってきているということです。

## 10—民主党政権とは何か

そこまでお話をして、最後にお話をしなければならないのは、民主党政権とは一体何なのかという話であります。

これは今まで私も指摘してきましたけれども、この政党は調整が嫌いです。要するに裏で手を握るのが嫌いで、官僚が嫌いで、結局何もできなかったという。つまり、政治の劣化というものが自民政権以来続いているという見方に対して、今日は若干のアンチテーゼでお話をしました。

つまり、物事には両面があるということです。メディアの言うことをそのまま信用して、メディアの言うように政治が動いているとしたら、この政権はもっと悪くなります。頑張っているように見えても、どこかでぼろが出て結局は倒れるのだという話になりますが、私はその両面のうちの駄目になるという話を、メディアがどうもやり過ぎたのだらうと思います。メディアと野党の大合唱の下に、国民もそうかなと思うときがしばしばあったということです。

しかし、さっきも言いましたように、世論調査がどこまで信用できるかという問題はあるにしても、やはり世論調査では常にかんりの支持率を民主党政権は持っています。民主党自体がそれを回復しています。結局、自民党は支持率が回復していないという事実の中で、今しばらくこの政党にやらせてみるかというのが今の気分だらうと思います。ここで政権を取り換える、舞台装置を換える、そしたらまた時間がかかるだろう。この政権が決していい政権だとは思わない。そして、スタートラインもかなり変だと。今ごろスタートしてどうするという気はありますけれども、しかし一応は走り始めたのだから、とにかく応援してみようという。多分これは今までのこの国の政治において国民が一度も示したことがない、そういう支持の仕方です。弱い支持というのではない、もちろん強い支持というのでもない、しかしこれしかないからという支持の仕方です。これは逆に支持する方も気楽でありまして、やはり駄目だったかと思えばそれっきりで済むわけですから、支持もしやすいという形になります。

最近、私が書いた幾つかのエッセイの中で、この国の政党政治は、いわゆる政党政治というよりは、

どうも戦前の中間内閣に近いという言い方をしております。中間内閣というのは、戦前、政党の指導者が総理大臣になることはなく、その政党からやや離れた、あるいは全く離れた人を総理大臣に選ぶことによって、幾つかの政党を与党化して運営していった内閣です。私は菅さんのときからそういう形に近くなったと思っています。野田さんも今はそうです。ところが、最初に私がお話をしたように、野田さんがもしデジャヴの形を取りながら自ら総理大臣として化けていくことができたならば、初めて政権交代後、民主党内閣ということが言える、二大政党の一方を形作る政権になると言えると思うわけであります。

お話をしたいことはまだまだいっぱいありますが、ここで一つ皆さんに最近私が編集した本をご紹介します。今日の議論のおしまいにしたいと思います。

## 11—政治の未来図

「朝日ジャーナル」というのは、昔、「週刊朝日」が出していた非常にレフトな雑誌で、今、「週刊朝日」が緊急増刊で年に一遍だけ出しているのですが、今回は「政治の未来図」ということで、一応私が特別編集をしました。冒頭はいわゆるナベツネインタビューです。読売のナベツネさんに朝日が取材をしたという非常に面白い記事になっていますが、そこで彼が9ページにわたって私のインタビューに応じています。あとは、私が一番信頼できる20人近い老壮青の政治学者に、「震災後、日本」を考える政治の視座があり得るかということで、飯尾潤、北岡伸一、田中明彦、山口二郎等々の論客が、ここでそろって競策、つまり「競う策」を展開しております。それ以外にも、グラビアに「初当選、私の1枚」とかいうのがありまして、「おお、この総理は若いときはこんなであったのか」というのが非常によく分かる写真も出ている等々、松下政経塾についてのルポとか、そういうものを含めて1冊500円ということで、もしよろしければお買いいただければと思います。

エピソード的に言いますと、渡辺さんはこれを非常に気に入らして、「俺はついに朝日に乗っ取った」という話になっておりまして、すぐに100冊をお買い上げになり、その後また100冊お買い上げになりました。200冊も買ってどうするのだと思いますけれども、「山里会」か何かで配るのだろうと思います。山里会で配っても、200冊はちょっと多いような気がしますが、彼としては会心の出来だということなのだろうと思います。

お買いくださいというのも変ですが、町の週刊誌のスタンドのところに行くと多分置いてあると思いますので、ぱらぱらめくっていただきますと、今日私が言ったような議論も含めて、今後の野田政権がどうなるのかという話について書いてあると思いますので、ぜひお読みいただければと思うわけです。

以上、今日は1時間というお話なので、ここでおしまいにしますが、まだまだ論じ足りないことがいっぱいあります。特に今日お話ししたくてできなかったのは、いわゆる自民党の終わりと、その後続いてきているこの民主党のもたもたぶりが、どうつながっていて、どうつながっていないのかということに関して、今日は十分なお話ができませんでした。これは私もどこかで書くと思いますし、またどこかで皆さまとお会いすることがあれば、そういうお話ができるかもしれません。

というわけで、今日は私が前座を務めまして、これから後はシンポジウムということで、私のよう

ないかげんな話ではなくて、実にしっかりしたシンポジウムが展開されると思います。ちょうど時間ですので前座はこれくらいにしたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました（拍手）。